

西村公朝作品収蔵記念／平成30年度（2018年度）春季特別展

西村公朝 芸術家の素顔

会期：平成30年（2018）4月21日（土）～6月3日（日）



西村公朝《天龍一指頭》

にしむらこうちょう
西村公朝（1915-2003）は当館の初代館長をつとめた仏像彫刻家です。写真の天龍一指頭は晩年の傑作のひとつです。一本指には言葉にはしがたい禅の神髄、あるいは仏教の悟りを示すという意味があり、鋭くも優しい眼光や顔立ちは師事した大西良慶師（清水寺管長）^{きよみずでら}に似ていると言われています。高僧の師と仏教の教えを巧みに取り込んで表現したところに芸術家としての真骨頂を見る思いがします。今回の展示は、東京美術学校（現在の東京藝術大学）で現代彫刻家を目指していたころの作品から最晩年の彫刻や絵画にいたるまで、仏像というジャンルにこだわらない芸術家としての側面に光を当てています。ご遺族のご厚意により、多くの未公開作品を含む資料が当館に収蔵されたことを記念し、本展示の開催に至ったことを関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

（当館館長 中牧弘允）

西村公朝 芸術家の素顔

吹田市立博物館では、4月21日（土）から6月3日（日）まで、西村公朝作品収蔵記念／平成30（2018）年度春季特別展「西村公朝 芸術家の素顔」を開催いたします。

当館初代館長の西村公朝は、仏像修理技術者として約1300体の国宝・重要文化財の仏像修理に携わり、仏像の造形を探究してきた人物です。また、京都・嵯峨野の愛宕念仏寺の僧侶として仏教の研学につとめたほか、晩年には、仏像彫刻家として「慈悲の心」を表現した仏像や、彫刻・絵画作品を制作しました。

とりわけ、自然素材によって仏の姿を表現した造形作品は多く、その数は400点を越えます。それらは「衆生悉く仏性有り」という仏教の一節から、西村は自然を構成しているあらゆるものに仏の本性があると考え考案されたもので、粘土や水、石、貝など、私たちの生活に身近な素材を用いて造られたものです。

本展覧会においても、このような作品を多数展示いたします。ここでは、展示する作品の一部をご紹介します。



(写真1) 対話する仏

1. 土仏

粘土に水を加え、手や割りばしなどを使って仏の姿を形作った作品です。造り方や形ごとに「おむすび仏」や「手こね仏」など、ユニークな名称がつけられています。また、それぞれの仕上げにもバリエーションがあり、そのまま素焼きしたものや、色をつけたもの、金泥を施したもの、ニス塗り光沢をつけたものがあります。

この作品は、《対話する仏》と名付けられた土仏です。粘土を平たく伸ばし、線彫りで散華などが描かれた光背の上に、親指ほどの合掌した小さな二体の土仏が乗せられています。題名に《対話する仏》とあるように、左側の仏がもう一体の仏に顔を向けており、仏同士が語り合っているかのようです。



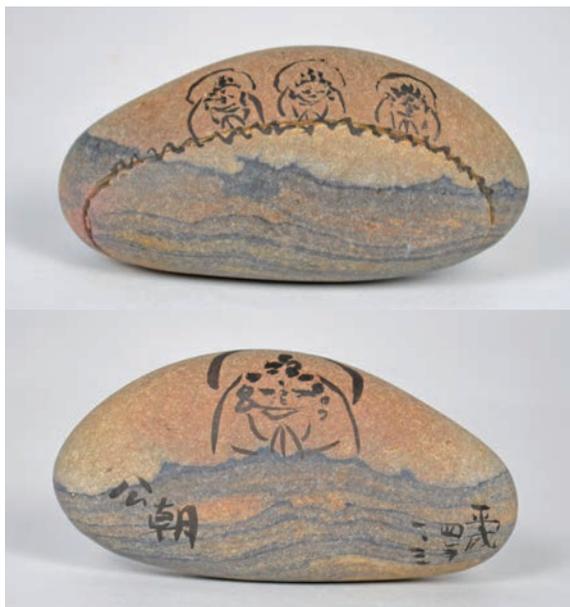
(写真2) 仁王さん(金剛力士像・吽形)

(写真3) 仁王さん(金剛力士像・阿形)

また、金剛力士像を造った作品もあります。金剛力士(仁王)は、仏敵を退散させる武器である金剛杵こんごうしよを持つものという意味の梵語から生まれた神です。通常、像となった際は、仏敵を威嚇するために、阿形あぎょうは怒りの表情をあらわにしている姿で、吽形うんぎょうは口を締め、怒りの感情を内に秘めた姿ふんぬで表現されています。本作品でも2体の像は忿怒の表情で表現されていますが、怖さや畏れだけでなく、どこか愛らしさをも感じさ

せる造形となっています。さらに、大胆な彩色によって背後の燃え盛る炎が表現されています。

公朝は、仏像の修理を行っていく中で、古来の仏像はほとんどが厳しい姿で表現されていると気づき、本当に苦しむ人々を救うためには、恐れを感じさせない優しい仏像があってもいいのではないかと思に至りました。この金剛力士像もまた、優しい仏像を造りたいという思いからできたものなのではないでしょうか。



(写真4、5) 四尊 [上：表、下：裏]

2. 石仏いしぼとけ

小石を素材とした造形作品で、それぞれの石のもつ形や模様、質感などからイメージされたほとけの姿が描かれています。この《四尊》は、平たい小石に4軀の仏の姿が描かれたものです。また、「平成四年一・三 公朝」とあることから、お正月の三が日の制作であることがわかります。さらに、石の下部に青い波線模様がついており、その模様から顔を出すように仏が描写されており、制作日も相まって、まるで波間からの日の出を表現しているかのようです。



(写真6) 大日如来

4. 植木鉢仏

植木鉢と粘土を使用し造られた仏です。土仏同様、素焼きのものや彩色が施されているものなどがあり、同じ仏であっても、姿や形はそれぞれ異なるものとなっています。写真7の《成道釈尊^{じょうどうしやくそん}》では、出家した釈迦^{しやくか}が瞑想^{めいそう}に入り、悟りに達して仏陀となった姿が表現されています。また、釈迦は仏陀となった後、座ったまま解脱^{げだつ}の楽しみを味わったとされています。本作品では、釈迦は植木鉢に腰を掛け、静かに微笑む姿で表現されています。解脱の楽しみを味わっている姿なのかもしれません。

自著『やさしい仏像の造り方』でこの植木鉢仏の造り方のほかに、植木鉢とガスコンロを使った家庭でもできる素焼の方法も紹介しています。

いずれの作品も、仏が愛らしく親しみやすい姿で表現されています。また、大きさも小ぶりで、玄関や居間などに気軽に飾ることのできるものばかりです。これは、日々の暮らしの中に仏を感じることを自ら実践した公朝の信条や姿勢を物語るものであるといえます。また、土仏や石仏、植木鉢仏などは、その造り方を様々なメディアで伝えています。この造り方は、様々な人々に自らの手で仏を造り出す楽しさや喜びを知ってほしいという思いから、特別な道具や技術が無くとも仏像を造ることができるよう公朝が考案したものです。現在、このような仏像の造り方を伝える本は数多く出版されていますが、公朝はその先駆けといえるのではないのでしょうか。

3. 貝仏

黒蝶貝の殻にほとけの姿を彫った作品で、石仏と同じくあまり加工はされず、模様や形状を生かしたつくりとなっています。本作品は、大日如来を殻の表面に彫った作品です。大日如来は宇宙の真理そのもので、森羅万象すべての存在の根源ともされています。貝の独特の光沢によって、幻想的な空間の中にいる大日如来の姿が演出されています。



(写真7) 成道釈尊

本展覧会においても、このような作品を数多く紹介いたします。仏を造り出す喜びや楽しみはどのようなものだったのかを出陳作品から感じていただけましたら幸いです。

(当館学芸員 市村茉莉)

平成30年度企画展・吹田市立博物館&パルテノン多摩歴史ミュージアム連携展示 ニュータウン誕生～千里&多摩ニュータウンに見る都市計画と人々 会期：平成30年(2018) 6月9日(土)～7月8日(日)



千里ニュータウンの4種類の団地住棟番号

高度経済成長期、都市部の深刻な住宅難にとともに、大量の住宅を供給するため、各地にニュータウンがつけられました。

国内にある大規模ニュータウンのうち、もっとも初期にできたのは、大阪府吹田市・豊中市につくられた「千里ニュータウン」[入居開始：昭和37年(1962)]です。千里ニュータウンは、大阪府企業局によって大阪都心から北に約15kmの千里丘陵に計画・開発されたニュータウンです。昭和33年(1958)に大阪府の施策として開発が決定し、昭和36年(1961)に起工、昭和45年(1970)に事業が終了しました。

一方、東京都多摩市・稲城市・八王子市・町田市にまたがる多摩ニュータウン[入居開始：昭和46年(1971)]は全国最大規模のニュータウンとなりました。千里ニュータウンの工事が進み、入居が始まった頃に構想が練られていました。東京都・日本住宅公団・東京都住宅供給公社が主要な担い手となったこのニュータウンは、昭和40年(1965)に計画決定されてから、結果的に40年という長期にわたる大開発となりました。計画区域には農業を営む集落が存在していたため、さまざまな軋轢も生まれました。

このようにこれら2つのニュータウンは、地域や開発手法、経緯が異なる一方、ニュータウン特有の共通性もみられます。短期間での核家族の入居による世代の偏りや急激な高齢化、建物の老朽化をどのように乗り越えるか、コミュニティ形成をどのように展開していくのかなど、

互いに抱える課題は枚挙にいとまがありません。

入居から50年前後が経過した現在、各地のニュータウンでは建て替えなど再生がすすめられています。このような時期に、互いのニュータウンを振り返り、見つめなおしてみることは、これからを考えるうえでも重要なことといえるでしょう。

本展覧会では、吹田市立博物館と公益財団法人多摩市文化振興財団(パルテノン多摩)が連携し、千里と多摩の2つのニュータウンのあゆみや特色、特に都市計画のあり方や人々の生活を振り返り、改めてニュータウンを見つめなおす契機としたいと思います。

(当館学芸員 五月女賢司)

平成30年度(2018年度)「さわる月間」 平成30年6月9日(土)～7月8日(日)



当館では毎年、企画展の開催に合わせて「さわる月間」を実施しています。平成28年度から、それまで取り組んできた「さわる展示」をロビーに常設化し、「ふれ愛観音」、「バスオール」、「米俵」、「力石」など触れて体験できる展示資料も年々充実してきました。「さわる月間」期間中は、さらに土器や瓦、和楽器、はきものなどを加えて「さわる展示」の強化月間とします。ぜひこの機会に「見る」だけでは得られない、触ればこそわかる新しい発見をしていただければと思います。

(当館学芸員 高橋真希)



平成30年(2018)1月25日に元大阪大学教授の上田篤氏にお話をうかがいました。



上田篤(うへだ あつし)

京都大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了後、建設省住宅局技官としてニュータウン計画に携わる。その後、京都大学工学部建築学科助教授、大阪大学工学部環境工学科教授、京都精華大学美術学部デザイン学科建築分野教授。現在も建築学者・建築家として活躍。京都大学助教授の時に、大阪万博「お祭り広場」の設計を担当。

中牧館長：当館では、平成30年(2018)6月9日から7月8日まで東京のバルテノン多摩歴史ミュージアムとの連携で千里と多摩のニュータウンに関する企画展を開催することになっています。上田先生は建設省にいた当時、ニュータウンの構想や実際の開発などに関わられたと思うので、だいぶ昔の話ですが、先生には生き証人としてぜひお話しいたきたいと思っております。

上田氏：僕は、以前にイギリスのニュータウンをいくつか廻りましてね。一番驚いたのはニュータウンの中心部には教会があることです。イギリスなどヨーロッパでは都市の中心に教会がなかったら都市と言えないんですよ。それを見たとき僕はびっくりして、ああ、一体、僕ら日本の専門家は何をしていたのか、と思いましたね。僕らはニュータウン開発というものを「近代化」と思っていたら、イギリスではそうではないんです。日本の住宅地で、宗教問題で有名になったのは大阪の香里団地です。香里団地の住民が「子ども達のために地蔵盆をやりたいからお地蔵さんを建てたい」と言ったが、大阪府は認めなかった。日本は戦後、政教分離ということが徹底して、宗教は一切駄目、「触らぬ神に祟りなし」になった。日本とイギリスのニュータウンの一番大きな違いはそれだったんです。

中牧館長：千里ニュータウンにも宗教施設は当初計画に無いですね。

上田氏：千里には一切無いですね。それからもう一つ、日本のニュータウンには、一般に川が無いんです。どこに行っても川が無い。ニュータウン開発の前の千里には田んぼがあったんだけど「ざる田」なので、あんまり水が貯まらない。それは、川が無いので粘土質の土が流れてこなかったということがあるんじゃないか。知らない日本の町に行っても、たいてい川があり、川を見ると私達はホッとしますが、ニュータウンには寺や鎮守の森がないだけでなく、それが残念です。

中牧館長：山田には山田川という細い川がありますが、ニュータウンの地域には溜池があるくらいでしょうか。

上田氏：川があったから山田集落だけは残った。ところで、公的に住宅を作るというのは日本では戦前はあまりなかったんですが、戦後は420万戸の住宅不足といわれて問題になった。それは、戦災によって多くの家が焼かれたこと、海外から引揚者が500万人も帰ってきたこと、それから戦争中に全然住宅が建てられなかったことなどのためです。こうした理由で住宅不足が言われ、その対策を国家がやることになって、最初、公営住宅という形でスタートしました。**中牧館長：**引揚者住宅とかいろいろな形でありましたね、当時は。

上田氏：それをやったのは建設省ですけども、じつは建設省ではそれをやる人があんまりなくて、僕が建設省に入った昭和31年(1956)当時の課長補佐以上はみんな軍人出身者だったんです。「どうしてか?」と言ったら、それが出来るのは役人の中でも陸軍や海軍の官僚だった。テキパキやれる、ということがあったんですが、また軍人の建築出身者たちが余っていたからでしょうね。

それともうひとつ、敗戦と同時に鉄需要が激減して、鉄が全く売れなくなった。そこで鉄鋼産業を救うために、当初、木造で始めた公営住宅を、西洋がやっていたような鉄筋コンクリート造りにするという政治的動きがあった。とりわけ軍人出身者たちは鉄鋼産業と結びついていたので話が早かった。だから私は元少佐のS課長のお供をして、当時、銀座にあった鋼材倶楽部にしょっちゅう出かけました。そこで公営住宅の鉄材需要の計画書を出すと、あっという間に国会で承認されました。

中牧館長：なるほど、鉄は国家なりじゃないですけど。

上田氏：そのうち、東京大学で建築を勉強した若い人たちがイギリスのニュータウンって事を言い出したんです。イギリスのニュータウンは、ご承知の通り、労働党が実現させました。保守党はあまり賛成ではなかった。ニュータウンはE.ハワードの田園都市論やC.ペリーの近隣住区論に始まるわけですが、その前には、フランスのC.フーリエの空想的社会主義とかがありました。そういうなかで田園都市論などは共産主義的な提案として社会改良を目指したんですけれども、今日、そういうものの影響はあまり出ていません、なかに教会があるぐらいですから。日本では宗教施設がない、といったことぐらいがその側面かもしれませんが。日本のニュータウンが徹底的に影響を受けたのは、イギリスのニュータウンの郊外立地や歩車分離といった制度ですね。

中牧館長：千里ニュータウンに隣接した千里山住宅地も、大正から昭和にかけて田園都市論に基づいて建設され、レッチワースをモデルにしています。ただし、公営の集合住宅ではなかったですね。

上田氏：建設省では鉄を売る論理だけでなく、自らの方向性として「公共施設としてのニュータウン建設が必要だ」という意識が役人の間に出てきました。しかし都市計画法では、公共施設というのは道路や公園のことであって、住宅ではなかったんです。それで、市営や国営の公園と同じように、住宅も都道府県営や市町村営のものを作ろうとした

訳です。公共施設ということはすべて賃貸住宅です。住宅難の人々は誰でも申し込めて「公平な抽選の結果、入居できますよ」という。というのも、地主が道路や公園などの公的なものの建設のために土地を提供した場合は税金はほとんどかからない。でも住宅の場合は公的なものであっても受益者はそこに住む人だけですから、土地を売った地主に多額の税金がかかってしまう。そこで出来たのが、都市計画法での「一団地の住宅経営」というシステムです。まとまりのある集合住宅を建設する法律でした。その規定に従ってやれば、地主は「道路並み」に税金を払わなくて済むようになった。ただし、この法律は賃貸住宅が原則で、分譲はあり得ない。ましてや土地だけを造成して、民間が自由にその上に住宅を建てる、なんてことはあり得ないのです。そこで初めはこの「一団地の住宅経営」でやってたんですけども、どうしてもそれだけではとても追いつかない。売れる土地はたくさんあるんだけども建てる人がいない、ということで、これを民間に建てさせようとした訳です。公的に土地を造成し、のち民間が買って経営してくれる、という方法がとれないか、と。でも、それでは道路並みの公共施設としては認められない、ということになってしまいました。そこで、どうしたら道路や公園並みに税金を安くできるかと調べたら、モデルになりそうな制度が西ドイツにあることが分かったんです。

中牧館長：おお、それがこの北島照躬さんらの本（『西ドイツ連邦建築法：都市建設基本法』（1961））につながる訳ですか。

上田氏：そうです。イギリスのニュータウンもそうなんですけれど、全部、公的なものとして位置づけられて土地を売った人にも税金があまりかからない。そうでなかったら土地を売っても一時的にお金が入りますが、あとガバーツと税金を取られるんです。そこで地主が土地を売って、民間が団地や一戸建て住宅を建設する際に、土地を売った地主の税金が安くなるヒントが西ドイツにあった。当時、私の上司だった北島照躬さんという人が西ドイツの様子を見てきて、同様の制度の導入が日本で可能かどうか、内閣法制局に何度も通ったんです。それでやっと先買権^{きんか権}というものを設定することによって認められた。例えば千里ニュータウンでも多摩ニュータウンでもいいんですけども、地主が民間に土地を売った際に、買った人が住宅を建設せずに転売して利益を得ようなどとすると「先買権」というものが働いて、土地を転売しようとしたら、地主から買い取った値段で公的な機関が買い戻すことができる、という制度です。土地の転売や一部の土地の高騰を防ぐことができるのです。だから、例えば、私が千里ニュータウンで100坪の土地を買って、25坪ずつの4軒分にして売って儲けようと思っても出来ないんです。それが、昭和39年（1964）にできた「新住宅市街地開発法」^{しんたくしやうまちがいはくはつほう}でして、初めて日本の千里で適用されたんです。千里ニュータウンでは、当初「一団地の住宅経営」で開発が始まったんですが、今、言ったようないろんな事情が出てきて、大阪府の関係者が「何とか新しい制度を作ってくれ」ということで、北島さんが大阪府としょっちゅう連絡しながら動いたんですね。

中牧館長：なるほど。

上田氏：それにたいして、イギリスのニュータウンの場合は分譲をほとんど認めてないんですよ。だけど日本は「土地や住宅の分譲を認めて欲しい」という要望が強かった。結局、

大阪府からの要望の下に建設省も動きました。北島さんが去った後、僕がそれを担当したんですが、それで法律が出来たらすぐに千里ニュータウンで適用しました。千里が第一号です。その次に私がやったのが泉北ニュータウンと多摩ニュータウン。後には京阪奈学研都市もそうです。こちらあたりはみな私が計画いたしました。

中牧館長：先生は昭和31（1956）年に建設省に入ったということで、まさに戦後が終わり、復興ではなくて成長が始まるという時代でしたね

上田氏：昭和31～32年（1956～1957）くらいは、まだまだ道路は舗装されていなかったが、35～36年（1960～1961）くらいからは、見違えるように舗装道路があちこちで出来るようになったんです。それは「道路以外には使いません」というガソリン税ができて、建設省にそのお金が入ってきたからなんです。それで一挙に名神や東名などの道路建設が進んだ。僕が建設省に入ったころの道路はまだまだひどかったんです。

中牧館長：田舎の砂ボコリの所がアスファルトになったんですね。

上田氏：そう。それで道路が整備され、遠隔地にも団地ができるようになった。今まで到底考えられなかったところに、多摩ニュータウンでも泉北ニュータウンでも、その他の団地でも造っても大丈夫、道路がちゃんと出来る、と。

中牧館長：なるほど。

上田氏：あと面白いことは、じつは多摩ニュータウンは、大昔、縄文人が住んでいたんです。千里ニュータウンには縄文遺跡がありますか？

中牧館長：まともな調査をしていないのですが、あった可能性は低いと思います。

上田氏：多摩ではたくさん出てきた。「パルテノン多摩」というところに資料があって、のちに僕はそこに行ってびっくりしました。いろいろ詳しく調べておられて、単なる住居跡だけじゃなく、たくさんの「落とし穴」まで調べられているんです。猪や鹿なんかを落とし穴で捕るとというのが何万と。「多摩は昔から人が住んでいた土地なんだ」ということがわかった。だから多摩はすごい所なのです。そこに現代人がニュータウンを造ったのも当然か、と思いました。

中牧館長：最後に、先生が関わられたニュータウンの中で思い入れのあるところがあればお教えてください。

上田氏：私が個人的に計画までかかわったのは、京都の「洛西ニュータウン」です。通過交通や部外者の侵入を防ぐために徹底的にクルドサック（袋小路）の道路を作って、そのほとんどを部外者たちが通り抜けできないようなものにしたんです。しかも緑道のネットワークを完璧に作りました。それが車道と立体交差するようにもしました。ただ、京都からの地下鉄が出来なかったことは残念ですが、それを除けば、なかに小畑川という大きな川も流れていて、洛西ニュータウンはニュータウンとしてはすごくいいものになっています。まあ、緑道ネットワークがすごく発達していて、街全体が公園のような、また迷路のような状態になっていて、犯罪がほとんど起きない、起こしにくい。そういうことを考えた上で設計したものなんですよ。

中牧館長：ニュータウンは奥が深いですね。本日はありがとうございました。

（2018年1月25日）

西村公朝作品収蔵記念／平成30年度(2018年度) 春季特別展

西村公朝 芸術家の素顔

関連イベント

●オープニングイベント

■会場／ロビー・特別展示室・常設展示室の一部

4月21日(土) 午後1時～2時20分

開会式・展示解説・シンセサイザー演奏会
演奏／西村公栄氏(愛宕念仏寺 住職)

●収蔵記念講演「西村公朝の時空を歩く」

■会場／講座室

■定員／120名(申込不要・先着順)

4月21日(土) 午後2時30分～4時

「祈りの造形の原点を求めてー中国従軍編」
講師／大成栄子氏(西村公朝 長女)

5月12日(土) 午後2時～3時

「羅漢さんの笑う日ー愛宕念仏寺復興編」
講師／西村公栄氏(愛宕念仏寺 住職)

●講演会

■会場／講座室

■定員／120名(申込不要・先着順)

4月22日(日) 午後2時～3時30分

「清水寺と西村公朝師」
講師／坂井輝久氏(清水寺 学芸員)

4月29日(日) 午後2時～3時30分

「樹に祈り木を彫る——木彫仏像の文化誌」
講師／児島大輔氏(大阪市立美術館 学芸員)

●連続講演「仏教は美」

■会場／講座室

■定員／120名(申込不要・先着順)

5月19日(土) 午後2時～3時30分

●「美術院の仕事 西村公朝先生と私」

講師／松永忠興氏(和束工房代表／仏像修復技術者)

5月20日(日) 午後2時～3時30分

●「タイムスリップした仏様 興福寺・阿修羅像模刻」

講師／松永忠興氏(和束工房代表／仏像修復技術者)

●クイズラリー

■会場／特別展示室・ロビー・常設展示室の一部 随時受付

5月5日(土)、6日(日) 午前10時～午後4時

吹田市立博物館ボランティア有志の会
※景品あり、観覧料が必要です

●館長ギャラリートーク

■会場／特別展示室・ロビー・常設展示室の一部

5月13日 午後2時～3時

講師／中牧弘允(当館館長) ※観覧料が必要です

●現地見学会

■いずれも拝観料が必要、事前申込が必要

①清水寺 4月28日(土) 午後1時～3時

西村公朝が構想・設計を務めた京都・清水寺の建造物「大講堂」や、修復に関わった仏像などを見学します。

講師／坂井輝久氏(清水寺 学芸員)

集合・解散場所／清水寺 定員／30名(多数抽選)
締切／4月10日(火) 必着

②愛宕念仏寺 5月27日(日) 午後1時～3時

西村公朝が住職を務め復興に尽力した京都・愛宕念仏寺を見学します。

講師／西村公栄氏(愛宕念仏寺 住職)

集合・解散場所／愛宕念仏寺

定員／40名(多数抽選)

締切／5月15日(火) 必着

●ワークショップ

■事前申込が必要

5月26日(土) 午後1時～4時

菩薩・如来の衣装を着てみよう!

講師／岩井共二氏(奈良国立博物館学芸部 情報サービス室長)

会場／講座室 定員／20組(多数抽選)

締切／5月15日(火) 必着 持ち物／ニット帽など

●西村公朝先生との出会い・ふれ愛観音像誕生秘話

ふれ愛観音像誕生のきっかけとなった川島昭恵氏を招き朗読ライブとギャラリートークを開催します。

①6月2日(土) 午後2時～3時30分

朗読ライブ「川島昭恵の語りのライブ」

講師／川島昭恵氏(語り部)

場所／講座室 定員／120名(先着)

②6月3日(日) 午後2時～3時30分

スペシャルギャラリートーク ※観覧料が必要です

講師／川島昭恵氏(語り部)、中牧弘允(当館館長)

会場／特別展示室・常設展示室の一部・ロビー

《応募方法》はがきまたはFAXに、イベント名、参加者全員の住所、氏名、郵便番号、電話番号を書いて博物館まで